寿岳文章の生きた軌跡と新村出

新村出記念財団重山文庫　新村 恭

昨年（2017年）、私は『広辞苑はなぜ生まれたか　新村出の生きた軌跡』を書きました。今日の講演タイトル「寿岳文章の生きた軌跡と新村出」はこの本をまねたものです。

あらためて、お話するために資料を読み、二人の交友関係に心底感心しました。寿岳文章が専門とした英文学、和紙、ダンテといったそれぞれの分野について私は、全くの門外漢でしかありませんが、新村出とその資料についてよく知っている、ということでお話をさせていただきます。

はじめに　寿岳文章が生まれ育った地を訪ねて

新村出と寿岳文章のつきあいは、寿岳文章が京都大学に入ったときから始まりますが、講演をここから始めるわけにはいきません。まず「寿岳文章の生きた軌跡」というからにはその生まれ育ちがどのようであったかということも知っておく必要があると思い、神戸の友人に車を出してもらって、現地調査に行ってまいりました。寿岳文章は寺で生まれ育っており、そのゆかりのお寺を見に行かなければならないと思い立った次第です。

ゆかりの三つの寺は、ひとつは神戸市の西の外れにあり、ひとつは北の外れにあり、もうひとつは市の中心部に近いとはいえ、狭い急坂を上ってゆくという、いずれも極めて交通の便が悪いところにあります。

寿岳文章が生まれた龍華院（りゅうげいん）というお寺は、「高和山性海寺（たかわさんしょうかいじ）」という大きなお寺の塔頭（たっちゅう）支院です。お寺に近づくと急に、車がすれ違うことができないほどの細い道になる、その少し先に龍華院はありました。住職にお話を聞いたところでは、もともとこの高和山性海寺は檀家を多く持って経営をしているというお寺ではなく、二百町もの大きな所領を持つことで経営をしていたそうです。さすがに二百町はオーバーですが、二十町でも広いです。ところが明治の廃仏毀釈や農地改革などにより、三十あった塔頭が今では三つになり、龍華院も田んぼのなかにぽつんと建っているような状況でした。本寺の性海寺の本堂は文化財としては残っていますけれども全くの無人です。墓地を経営しているということもありません。

小学生になった後、寿岳文章は一番上の姉の嫁ぎ先のお寺である石峯寺（しゃくぶじ）に養子に行くことになります。このお寺は神戸のいちばん北の外れにあります。車で龍華院から京都大阪と播磨を結ぶ旧街道を向かいますと、淡河（おうご）というところに出ますが、その先、寿岳文章が卒業した小学校である「好徳小学校前」という交差点からかなり走って山の突き当たりに石峯寺はありました。生家本寺の性海寺の所領がそのまま「性海寺」という地名になったように、この石峯寺はもともと「石峯寺村」というかなり大きな所領を持っていました。ほとんどが棚

田と山林のようなところとはいえ、それでも広い所領を持っていて盛期には十七から十八の塔頭があったといわれています。こちらも今では三つになりましたが、立派な本堂が重要な文化財として残っています。この石峯寺の養子となって僧の修行をしていた頃をのちに回想している文章があります。

> 私は姉の嫁いでいる播州の奥の真言宗の山寺で、師僧すなわち義兄のあとについて法事や葬式の助法をしていた。二里も三里も離れた寺へ手伝いに行って、日が暮れてから途中に家一つない山道をただひとりで帰ってきた恐ろしさは昨日のようだ。墓地の側を通るときや、気味わるい水をたたえた池と池との間の細道を通るときなどは、小さな提灯の燈だけを頼りに、ややうつむき加減になって、一心に不動明王慈救呪〔災害を避ける呪文〕をつぶやきながらすたすたいそいだものである。田舎の葬式に於ける小僧の役目は、行列が葬家から墓に行くまでの間、両手に繞鈸を持っていて、助法僧の親玉がチーンと引磬を打つとヂャラーンと鳴らすに在る。村によっては墓まで一里近い道のりがある。飲み食いに暇どって葬列が出るのはたいてい夕暮に近く、冬などは完全に途中で日が暮れてしまう。雪まじりの木枯が吹きあれて、墓につづく山の小みちの空気は身を切るように冷たい。（「蛔蟲と河豚」俳句誌『断層』昭和15年）

好徳小学校を卒業した寿岳文章は、そのあと東寺中学校に入学します。おそらく東寺中学の宿舎に寄宿し、法事や葬式のときに手伝いをしていたのでしょう。東寺中学校は京都の東寺のすぐ隣にあり、現在では洛南学園となり、洛南高校と附属中学とがすぐ隣にありますが、どういうわけか洛南高校附属小学校は、後に寿岳一家の住まいとなる向日市にあります。この洛南学園の校歌と、真言宗の大学である高野山の種智院大学の校歌は、いずれも寿岳文章による作詞です。

東寺中学を卒業すると関西学院高等部に入るのですが、この学校へは真言宗の大龍寺に寄留して通っています。この寺は空海が入唐前に訪れ、帰朝後ふたたび来たので再度山と号され、そのまま地名にもなっています。ここは急な山道、坂道のなかにあります。当時関学は神戸市灘区の王子にありました。今でも平日はバスが通っていないようなところを、歩いて通っていたのでしょうか。好徳小学校にも歩いて通っていたとすれば、学生時代は通学に歩くだけで足腰がかなり鍛えられていたのかもしれません。

三寺とも、周りに民家はほとんどありません。ですから自然豊かな中で、大いに読書ができたことでしょう。寿岳文章は寺という仏教の環境のなかで生まれ育ったということは、はっきりしています。完全に仏教人です。

Ⅰ　新村出と寿岳文章の交友、人間関係

重山文庫には新村出と寿岳文章の往復書簡が所蔵されており、これらの書簡の日付、葉書であるか封書であるか類別してリストアップしたものをホームページで見ることができます。往復書簡の通数は、レジュメでは629通＋αとなっていますが、このプラスαというのは、まとめて整理保管している書簡のほかにも、日記の間や、研究ノートの間、本の間などにはさんであるものがまだあるのです。そのような書簡は『紙漉村旅日記』の間にはさんであったりするものは確かなのですが、全ては把握できていませんが、十通は下らないと思います。

先に述べましたように、二人の付き合いは、寿岳文章の京都大学選科生の頃から始まりました。京大の図書館に新村出をしばしば訪ねたことを、のちに寿岳文章が回想していますが、お互いに住まいを訪ねて談笑することもじつに多かったようで、これは新村出にとっては大変珍しい関係だったのではないかと思います。その様子がよくわかる比較的初期の書簡をごく一部ですがご紹介しましょう。

最初に新村出の寿岳文章宛です。

本夕は久々にて君に接し、而も愛書読書について君に接し、こよなき喜びをおぼえ候

（昭和６年９月16日　新村出寿岳文章宛〈ハガキ南禅寺北宛〉）

きょうは幸なる半日をすごし候。毎々ありがとう存候。昨年三月二十五日の日記に云わく「晴れ、うららかなる日和、夕ぐれ半月中天にかかる向日町向日庵よりのかえりじ、薮かげの農地の地ざかいに連翹（れんぎょう）のつぼみいちはやくふくらめるをみとむ。いまだ木々の芽もめぐみいでぬうちなり。」きょうのことも亦日記にかきつけておくべし。来春のおもいでぐさ、たのしかるべし。山門名跡志を閲（け）みし候に、向日の里は、ほととぎすの名所なるらしく「なくやむかひの山ほととぎす」などのうたみえ候。

（昭和10年４月３日　新村出寿岳文章宛〈ハガキ向日庵宛〉）

新村出にとって和歌を詠むことは生活の一部でしたが、連翹の里である西向日を詠んだ一連の歌が残っておりますのでご紹介します。

連翹の町　西向日町
連翹の花のさかりをたずねきぬまた来む春のおぼつかなさに
たまきはるいのちなりともこの春のはなをし愛でむ連翹の里
連翹の村一めぐり去りあへずまた一めぐりめぐり来にけり

次に、寿岳文章の新村出宛ハガキです。

昨日は長く御邪魔いたし、お話やら御馳走やら数々のおもてなしを受け、近頃うれしき半日にて候らいし。　（昭和11年2月17日　寿岳文章新村出宛ハガキ）

昨日はつい長居いたしまして、あとで咳にお困りのようのことなかりしやと案じております。　（昭和12年5月3日、寿岳文章新村出宛ハガキ）

新村出の付き合いのなかでも、これだけ一緒に楽しく談話を交わした相手は他にいないのではないでしょうか。また、寿岳文章の京都大学時代の書簡からは、新村出が就職の世話をしていたこともわかります。

一昨日、直に書状相認め先方へ差出し候処、本日返書まいり、乍遺憾既に決定済のよし、小生も残念に存候。　（昭和2年4月1日、新村出寿岳文章宛〈封書南禅寺北宛〉）

……京都女子専門学校の英文科に、このたびいよいよ中等教員無試験検定の特典が下附せられたるやにもれ聞きました。昨年、先生より小生を同校へ御推薦下さいました節は、すでに空席がございませんでしたが、その後朝倉校長にお出会いました時の話に、無試験検定の特典が下れば英語の時間数も増すであろうゆえ、或は教師を要するかも知れぬとございました。もしさようの事がございまして、小生でも採用していただければと存じ、甚ださしでがましきことながら、昨年の御厚情に甘え、先生に再び右につきお願いいたしたいと存じ……朝倉校長に小生のことしかるべく御伝え願えませぬでございましょうか。只今は中学に一週三十二時間も教え、こころざす勉強も思うにまかせぬ有様にて、もし少しなりとも今よりよき境遇にあり得たらば、どんなにうれしく思うことでございましょう。……

（昭和3年1月23日、寿岳文章新村出宛〈封書〉）

時には寿岳文章の随筆に厳しい批判をして、「丙の下」と書いて送りつけることもありました。当時は「甲乙丙」のなかでもさらに良いものは「甲の上」でしたが、「丙の下」ですから最低です。

Ⅱ　新村出とともに歩んだ寿岳文章

1　江戸中期の真言宗の名僧慈雲尊者への敬仰

寿岳文章が若いころから影響を受けた人物に、江戸中期の真言宗の名僧である慈雲尊者（じうんそんじゃ）がいます。慈雲がいかなる名僧であったかについては、寿岳文章が書いたものからよく伝わってきます。英文学の教師として詩歌に明るい寿岳文章は、慈雲尊者鑽仰会編の『慈雲尊者の面影』（昭和10年）に「尊者の詩歌」について書いています。そして、晩年に訳したダンテ

『神曲　天国篇』の巻末「神曲改訳の作業を了えて」という文章の冒頭にも、次のように、慈雲尊者への敬仰の念が綴られています（集英社、1988年）。

……仏教各宗派の教相の別に拘泥せず、その勝れているのを飽くまで採り用いるのが、有徳の僧となる所以だというのである。小人は、ややもすれば自分の所信だけを墨守して、楯の半面を忘れやすい。結果は極めて固陋な島国根性となり、地方的感情となる。尊者は徹底した愛国者であると共に、いな愛国者であったればこそ、他の半面、また徹底した世界主義者でもあった。これが、尊者の学風行跡に、悠揚迫らない大海の趣きの見られる所以である。

……尊者の梵学は、ついに梵学津梁（ぼんがくしんりょう）一千巻の編纂に結実した。ひとくちに一千巻とことも無げにいうが、この学問の伝統がほとんど萎靡沈滞していた当時にあって、近世初頭の人文主義者たちがギリシア=ローマの言語を読み解くのに幾十倍する困苦と不便とに耐え、『群書類従』をはるかにしのぐこの浩瀚の編述をなしとげたこと、まことに驚異である。……

……フランスの碩学シルヴァン・レヴィは、明治三十一年、親しく高貴寺を訪ねて三日間をその学寮にすごし、尊者の偉業に随喜渇仰した。……

〔末尾近くに、尊者の母の慈雲宛書簡を紹介〕

今思い出すと、私の青春が描き出す人間模様も、相当に多彩であった。エスペラント運動一つをとりあげても、いろんな信条、いろんな主義、いろんな国籍の人物が、私の周辺をからまりあってゆく。しかし、慈雲尊者を軸として、事や物の本源に遡ろうとする私の意欲は、人生行路のどの面でも、強まりこそすれ、決して薄れなかった。

慈雲こそ、まさにわが師、わがヴェルギリウス〔『神曲』の案内人〕であったのだ――

以上が齢八十八の米寿にあたり、最後の『神曲』大改訂を了え、これだけは述べておかねばならぬと思うすべてである。

寿岳文章が生まれたのは、新村出が結婚した年で、ほぼ親子ぐらいの歳の差があります。当然、たいていの経験は新村出のほうが先なのですが、二人が同じようにかなり幼い頃から読んでいたであろう書に慈雲尊者の『十善法語』というものがあります。これは教書としてはかなり著名なもので、殺生するなかれ、盗みをするなかれ、といった「べからず」をいくつか並べて「十善」を説いたものです。

新村出は言語学が専門ですので、サンスクリット、梵学の調査にはかなり興味を持って現物にあたりました。明治42年のパリ遊学中には、シルヴァン・レヴィの授業を受けています。シルヴァン・レヴィはフランスのインド学者、東洋学者で、のちに日仏会館の初代館長を務めています。新村出は「慈雲尊者伝記資料」について詳説した論考を書き、「慈雲尊者

の母」という論考では慈雲尊者の母の手紙の紹介をしていますので、新村と寿岳文章とのあいだで慈雲尊者のことが話題にのぼることがあったのは、間違いのないところです。先に挙げた寿岳文章が紹介している慈雲の母の書簡についても、新村出を通して知った可能性が非常に高いのではないでかと推察しています。

2　『キルヤム・ブレイク書誌』刊行、書物への関心の高まり

18～19 世紀イギリスの詩人、画家であるウィリアム・ブレイクは寿岳文章が最も影響を受けた人物であり生涯の研究対象でもありました。2013 年には新しく岩波文庫の寿岳文章訳『ブレイク詩集』が編まれています。このウィリアム・ブレイクについて、伊藤長蔵という神戸の出版人から依頼を受けて、新村出が寿岳文章へ手紙を書いています。これらの書簡をきっかけに生まれた伊藤長蔵との縁が、やがて『キルヤム・ブレイク書誌』の刊行へと繋がることになります。『キルヤム・ブレイク書誌』の重要性については今回は触れませんが、書物の刊行に伊藤長蔵という人物が大きな役割を果たしていたということです。この書簡に登場する笹岡民次郎は、著名な図書館人で、京都大学図書館の司書官長として館長である新村出の片腕となっていた人物であることを補足しておきます。

> 神戸の人にて出版界の新人なる伊藤長蔵氏、W. Blake の事に付助力者を得たしとの事、貴所 Blake の事御研究の由に付、推薦いたし置しが、一度御面談被下度、明後（金）午後三時頃大学へ来る筈に付、若し一中にでもお出の都合□□御立寄被下まじきや。
>
> （昭和２年７月６日、新村出寿岳文章宛〈ハガキ〉）

> 拝啓　過日はブレイク書史の件につき御配慮に預り、厚く御礼申上候。さて毎々御手数を相掛け恐縮に存じ候えど、ブレイク書史編纂につき近日中に一度笹岡民次郎様にお目にかかりて御伺いしたきことども有之……
>
> （昭和２年７月 11 日、寿岳文章新村出宛〈ハガキ〉）

> 拝復　過日は御面倒なる事おたのみいたし候処、早速お引うけ被下、伊藤氏もよろこびしことに有之候。……　（昭和２年７月 13 日、新村出寿岳文章宛〈ハガキ〉）

> …私は新村博士の紹介で、始めて伊藤長蔵氏を識った。…私が遂に書物道の一筋につながるに到った因縁の一半は、伊藤氏の出現によるといってもよい。…伊藤氏がずっと出版事業を続けていてくれたら、恐らく私は自分で向日庵私版をおこさず、……〔相談役〕の役割を、『ぐろりあ・そさえて』のために果たしていたであろう。
>
> （寿岳文章「自装本回顧」昭和 10 年『寿岳文章・しづ著作集６ 書物の共和国』春秋社、所収）

この頃、寿岳文章がウィリアム・ブレイクの詩を翻訳刊行する傍ら、妻の静子もハドソンの

『はるかな国　とほい昔』を翻訳刊行しています。寿岳文章の旺盛な出版活動は、書物出版においても先輩格であった新村出に大きく支えられていたようです。次の書簡からは、新村出が出版社に橋渡しをしていたことがわかります。

…ハドスンの翻訳〔しづ訳『はるかな国 とほい昔』昭和一三年、岩波文庫〕につき一方かたならぬ御配慮にあずかり、感謝にたえませぬ。先生の御言葉により、先般発行書肆に対し、翻訳権ならびに、さしえ複製許可譲渡を依頼いたしました。……静子に代わりまして厚く御礼申上げます。　（昭和８年７月 12 日、寿岳文章新村出宛〈封書〉）

3　和紙研究の道へ

寿岳文章は、仏教であったり、ウィリアム・ブレイクであったり、和紙であったり、ダンテだったり、と全く別のようなことを同時にやっています。娘の章子先生によれば、父は全く別のことを同時にやるように見えるけども、本人のなかでは全て繋がっているらしい、ということを言っていますが、なかなか私にはまだその繋がりが理解できません。和紙研究もそのなかのひとつでしたが、寿岳文章を書物愛の世界から和紙研究の道へ誘ったのは新村出である、ということはかなりはっきりとしています。

…新村先生が、日本の紙を調べておく必要があるというので、自分はもう齢をとってくるから、まあおまえがかわりに調べてくれ…

（寿岳文章「私の自叙伝　紙漉村行脚のころ」NHK 教育テレビ、1980 年 11 月）

これと同じことが『紙漉村旅日記』の序文にも「老来、山間僻遠の地など意に任せぬゆえ、自分に代ってやるように」言われたと書かれています。昭和 11 年に新村出が主宰する和紙研究会では、寿岳文章が趣意書の素案を書き、中心メンバーとして和紙研究に尽力するようになりました。そのあとに出た『紙漉村旅日記』は帝国学士院の有栖川宮学術奨励金によるものですが、この奨励金は新村出の推薦により受けたものでした。重山文庫には和紙の研究ノートが 13 冊残っていますが、この学士院への申請書がノートに挟まれて残っておりました。どこの地方に行くといくらかかる、と地方別に金額が書かれており、かなり丁寧に趣旨と費用を書き出しています。一年間に 1000 円あまり、三年間のトータルで 3456 円という申請を出しています。当時の葉書２銭から換算すると 100 万円ちょっとでしょうか。ですからこのようなかたちで寿岳文章と静子の紙漉村調査は、新村出の御膳立てで行ったといえるのではないでしょうか。申請通りの額が出たかどうかはわかりませんが、新村出が個人としても、かなりサポートをしていたことが次の書簡からもわかります。

きょう帰宅いたしましてから、いただきましし御心尽しのもの開封いたしましたところ、

思いもよらぬ多額なのにびっくりいたしました。こんなにいただくわけはない、一部分だけいただいて、あとは御辞退せねば何としても申訳がないと考えてもみましたものの、よくよく考えてみますと、和紙研究にできるだけ進ませようとの、先生のあついお心がこもっているように感ぜられ、…　感涙にくれました。……

（昭和一四年四月一九日、寿岳文章新村出宛〈封書〉）

昭和15年8月、新村出と寿岳文章は杉原紙の研究のために兵庫県の杉原谷を一緒に訪れています。杉原谷が杉原紙発祥の地であるということを最終的に確認するための調査でした。これは地元にとっても杉原谷の歴史にかかわることとして一大事でした。

この調査については新村出筆の『杉原谷誌』という詳しいノートが残っております。昭和14年のはじめから書き始めていますが、このノートのなかに、昭和14年1月13日付の斎藤茂吉の葉書が挟んでありました。斎藤茂吉から門下生である杉原谷出身の山口茂吉を紹介したという内容の葉書です。山口茂吉がちょうど東京に出ているので、学士会館にいる新村に会いに行かせるということで、実際に4月18日に学士会館で二人が会っていたことを示す、そのときの山口の名刺もこのノートの中に入っています。そのようなことから調査の記録まで、さまざまなことをこのノートに記しています。

この杉原谷調査については、一方の寿岳文章の杉原谷紀行にも、昭和14年に行こうとする企画が果たせずに15年になったと書かれていますが、杉原谷出身である山口茂吉と何度も手紙のやりとりをして細かな指示設定を行い、昭和15年8月2日、3日に念願の杉原谷調査が実現した、ということだったようです。このときに寿岳が撮った写真などもこのノートに貼り付けてあります。二人は名塩にも一緒に調査に訪れており、和紙研究の道をともに歩んだ間柄でもありました。

4　ダンテ『神曲』の翻訳

寿岳文章は東寺中学時代に教わった英語の非常勤講師が京大英文学科の上田敏門下生だった影響で、『海潮音』が座右の書になったと回想文に書いています。これが寿岳がダンテに近づいた始まりだったかもしれません。上田敏の没後、彼の『神曲未定稿』を読んだことが、訳したダンテ『神曲』の序文に書かれています。

越えて一九一八年の春であったか、京都の星野書店から、上田敏『ダンテ神曲未定稿』が限定販売されたとき、中学五年生の私は読みたくてたまらず、顔見知りの書店、寺町三条上ル若林春和堂に赴き、事情を話し、貸してもらい、一晩かかって写し終り、翌日返しに行ったことを覚えている。

（寿岳文章訳、ダンテ『神曲　地獄篇』「序」集英社、1974年）

また、寿岳はダンテ研究者として知られる大賀寿吉（おおがじゅきち）と「ブレイク死後百年記念展覧会」で会

っています。このあとダンテに向かい、実際に翻訳の仕事を始めていくのは1967年に新村出が亡くなったあとになりました。

〔ブレイク死後百年記念展覧会で〕ブレイクが製作した七枚の銅版挿絵実物の出展に際し、私は在野のすぐれたダンテ学者大賀寿吉の知遇を得たからである。……私は翁と交遊を密にし、翁からしばしばダンテの偉大さについて聞かされ、貴重なダンテ文献をもらった。……翁は私に向かって、君はいまブレイクに専心しているが、そのうち必ずダンテにとりつかれる日が来るであろう。来なければならぬはずだと言った。君がもしダンテを勉強するなら、吝(おしむ)みない援助を与えよう、とも言った。

（寿岳文章訳、ダンテ『神曲　地獄篇』「序」、集英社、1974年）

一方、一高時代の新村出は大変な文学青年で、森鴎外訳の『即興詩人』からダンテ『神曲』の存在を知り、のちの欧州留学の際に遊学したイタリアで初版の原本を観た、と回想しています。新村は、南蛮・キリシタン関係の随筆を多く遺していますが、『南蛮更紗』（改造社、1924年）には「私は座右にあった邦訳の『神曲』を手にした。それは山川丙三郎君が心血を注がれた訳篇である」（「地獄小話」1923年、初出不明）とあり、『神曲』からの例示も多く、かなりよく読んでいたのだろうと思います。

上田敏は新村出の京都大学の同僚で同じ頃に着任しています。新村出が明治42年4月に帰国してから大学がはじまる9月までのあいだ、当時は京都大学に単身赴任していた上田敏と寓居が一緒だったことがあります。それより以前、パリに留学したときに住んだ家は、上田敏が出たあとに新村が入った、というようなこともあり非常に親しい友人でした。はたして本当かどうか、寿岳文章が一晩借りて写したという上田敏の『ダンテ神曲未定稿』ですが、この星野書店から出た本は新村が中心になって刊行したものだと思われます。重山文庫にある3冊の『未定稿』のうち「訂正用」という文字が入ったものがあり、新村が序文に助言、例言、凡例を書いております。

新村出は大賀寿吉とも親交があり、重山文庫には大賀寿吉からの新村宛書簡が11通残っていますが、そのうちの1通はこの『未定稿』の誤植の指摘です。京大の図書館には非常に優れたダンテの文献資料が、大賀寿吉の出身である岡山の川から名前をとった「旭江(きょくこう)文庫」として残っているのも、新村との縁が関わっているのだと思います。その後、昭和25年、新村は日本ダンテ協会創立にあたって会長に就任しています。

付　両者の好んだ西行法師の和歌

慈雲尊者、ウィリアム・ブレイク、和紙、ダンテ、という寿岳文章と新村出に共通する四つの関心について述べましたが、もうひとつ極めつきともいえるものに、真言宗の僧である西行法師の和歌があります。これは、西行69歳のとき、再び奥州に勧進に行き、東海道の難所の中山峠を越えるときのもので、新村出の最も好んだ歌のひとつです。

年たけてまた越ゆべしと思いきや命なりけり小夜の中山

この歌について、新村は次のように述べています。

〔記者から〕好きな歌を三首ばかり聞かせてください、と望まれたのでトッサの思いつきに、人麻呂の「夕浪千鳥」の一首と、式子内親王の「玉の緒よ」の一首と、最後に「佐夜の中山」の西行の名歌と、これら三首をそれぞれ妙味と思うとろを説いてきかせたことがあった。ことに西行のこの一首は、……それが郷里に縁がふかいばかりか、いまこの老境に達してはいよいよ深くこの名歌に心がひかれるのである。

（「私の歌歴自叙」『新村出全集』第 13 巻）

中山峠は現在の掛川市の北方で、新村の生家の関口家があった菊川に近いので親近感があるわけです。そして、「命なりけり」＝「命あってのものだなあ」に強く惹かれたと思われます。

寿岳文章は『新村出全集』第 9 巻「和紙篇」の「解説」を書いていますが、「講演に随想に、好んで引用された歌」としてこの歌を冒頭に挙げて解説をはじめています。文章もこの歌を大変好んでいたようで、次のような本歌取りの二首があります。

年たけてまた相見むと思ひきやいのちなりけり播磨杉原（杉原紙研究所寿岳文庫）

年を経てまた鏤句（るく）すべしと思ひきや命なりけり神曲改訳（神曲改訳の作業を了えて）

両者は歌の好みまで似ていた、ということをご紹介いたしました。

Ⅲ　寿岳文章の新村出への想い

まとめとして、想いあふれる新村出への追悼文をご紹介します。これまでの両者の経過を見ますと、寿岳文章によってこのような文章が書かれるのも、もっともだと思われるのではないでしょうか。長くなりますが、追悼文集『美意延年』（新村出遺著刊行会、1981 年）からご紹介します。最初は、「恩師の面影をしのぶ」と題して寄せたものです。

……しかし、私が新村出先生を「恩師」と呼ぶとき、先生の編まれた『広辞苑』のこの釈義では、満足しきれないものがあまりに多く付着している。大学生時代だけに限ってみても、受けた教えが他の恩師たちのそれと比べてけた違いに多く、深く、また広く、「世話になった」程度に到っては、新村先生と比べられる恩師は、ほかに一人も見出せないからである。先生は、私にとって、文字通り「慈父」であり「悲母」であった。つまり、英

語で表現すれば、不定冠詞でなく、「定冠詞」をつける恩師は、新村先生以外に、私には無い。

寿岳文章は、幼少期は家庭環境に恵まれなかったということもあり、いっそう強く新村出を「慈父」「悲母」のように感じていたのだろうと思います。続きです。

……言語学が先生の本命であったから、かかわりをもつ知識の領域の広汎なのは当然だが、先生の場合、その整理は、「年譜」の形をとって行われたように思われる。天体にせよ、動植物にせよ、その他自然界・人間界、もしくは超自然界のあらゆる事象について、先生は一つ一つ年譜の原簿を作り、その事象についての知見を得るたびに、書きこみや、貼りこみをなされる。その年譜原簿は、厖大な数と量にのぼるであろう。戦前から戦後にかけて、私はその一冊『慈雲尊者年譜』を借りていたが、先生自身が墨書された年譜本来の基礎的な史実を軸とし、長年月にわたって、新しい知見を得るごとに書き込みや貼り込みが加わり、必要とならば朱筆によるコメントもあるので、その年譜は言わばおのずと『慈雲尊者事典』となっている。……

私は京大文学部学生のとき、言語学ではなく、英文学を専攻し、石田憲次先生やエドワード・クラーク先生にも親近したが、冒頭にも述べたように、在学中はもとより、京大を出てからも、学問と人生の両面にわたって、最も親身な御恩をうけたのは新村先生であった。それは、先生からいただいた書簡の夥しい数からも言えることである。ことに忘れられないのは、私が傍系の私学から選科生として京大へはいったので、何かと身分上不利なのをいつも念頭に置かれ、学位だけは取るよう、折にふれてすすめられた。だから、すでに定年退職されていたにもかかわらず、戦後まもなく私の提出した学位請求論文が教授会で審査決定される当日、先生の気のもみようは大変なもので、現職の教授と連絡をとられ、通過したとの報告を受けられるなり、電話でいち早く私の家へ知らして下さった。その日その時刻、私は他に用事があって、京大文学部の構内にいたのだが、教授会が終り、知り合いの同学の教授とも行きあったにもかかわらず、彼は審査の結果につき何も言わず、通りすぎた。私が新村先生を「慈父」「悲母」と呼ぶゆえんである。

次は、新村出逝去直後、1967年8月21日の『東京タイムス』に「新村出先生の思い出」として掲載された追悼文を『美意延年』に収録したものです。

先生はどのような学説にも、まず心をむなしゅうしてはいっていき、とるべきものがあればとるとの、非常に広やかな態度を持っておられた。だから私が特異な例ではなく、先生の教えを受けた人たちは、みな一様に私と同じ思いにふけっていることだろう。

先生のお名前とお仕事は、私が京都大学文学部の学生となる前から存じあげており、ひ

そかに敬慕の念を寄せていた。大正十三年の春、選科生として京大文学部の入学試験を受けたとき、学問に従うものの心構えについて書けとの論題が出た。どの先生が読まれて採点されるのやら、もちろん分らなかったが、私は世の中が乱れに乱れていた十四世紀に、戦争のための流れ矢を避け、東寺の五重塔の楼上で講義をしたと伝えられる（事実ではないらしい）杲延（ごうえん）という学僧の事績を取り上げ、もの学びする者はすべからくこの覚悟を持つべきであるとの趣旨をつづった。読んで採点された新村先生は、私をマークされたらしい。後年、先生はわざわざその答案を私に返されたが、分に過ぎた点数がつけてあった。

先生と私との水魚の交わり（あえてそういわせていただこう）は、これを契機として始まる。

私は英文学を専攻したので、在学中先生からは言語学の普通講義を聞いただけなのに、急速に先生と親しくなっていったのは、当時先生が京大付属図書館長をなさっており、書物好きな私が、館長室に先生をたずねて、あれやこれや書物談をかわしたことなども、少なからずあずかっているだろう。

私が京大を出た年に、第一次世界戦争が産んだ一代の風雲児で、すでに早く故人となった伊藤長蔵氏が、範をイギリスのウィリアム・モリスに取り「ぐろりあ・そさえて」という書店を神戸に設け、私と同郷のよしみもあって新村先生のところへ一緒に何くれとなく相談にいったことも、先生と私とを緊密に結びつけるきづなとなった。先生の伊曾保物語古版本展も、柳宗悦氏の記念すべき著『工芸の道』も、私の『ブレイク書誌』も、すべて伊藤氏の熱意の結果であった。

書物愛から出発して、私が和紙の研究に打ち込むようになったのも、先生の導きによるが、それからそれへとつながる学問の糸、情愛のほだしをたぐってゆけばきりがないので、この辺で筆をとめる。先生とは、一家をあげて親しくさせていただいた。私の娘が国語学をやるようになったのも、先生の影響無しとしない。先生は私たち父子二代にわたる恩師なのである。

最後は、1971年2月から刊行された『新村出全集』（筑摩書房）の宣伝用内容案内の「言葉――人間性の真の実現」とした推薦文を『美意延年』に収めたものです。

生をうけて七十年、私は多くのすぐれた師友にめぐまれてきたが、もの学びの意義と楽しみを、慈父のように身を以て提示されたのは新村博士であることを、いましみじみと思う。これは博士に教えられた者のすべてがいだく共通の感じであろう。

枝葉に注意を集中するものは根幹の存在を忘れ、大本に就くものは末節をないがしろにする。生きるにもせよ、学ぶにもせよ、私たちはとかくこの弊におちいりやすいが、新村博士の生きかたや学びかたには、巨視と微視の実にみごとな調和があった。……あのドイツ人文主義の代表者〔フンボルト〕と同じく、言語は個人と社会とを最も緊密に結びつける力であり国語は国民性の最も直接的な表現であるとの見地に立ち、言葉を通して身や

心の諸能力が美しく調和するところに、人間性の真の実現があると確信されていたからである。その信条が、いつも博士に、生活の場でも学問の場でも、寛容で博大な立場を採らしめていたように思われる……。

このたび博士一代の偉業が、全集としてまとめられる。知遇を得た門弟の一人として、よろこびこれに過ぐるは無い。

このように見てきますと、かなり違う分野の人であるにもかかわらず、なぜか全てにわたって両者は共通しています。両者に通底するのはヒューマニズムではないかと私は思っております。寿岳文章はエコロジストでもあったということですが、エコロジズムとヒューマニズムとは全然矛盾しません。それは愛好した文学作品についてもいえることですが、やはり最初に盲目の学生である岩橋武夫と出会い、その妹と結婚しているということも影響していると彼自身は言っています。非常に人間としての苦悩を負いながらも、それに負けずに立ち向かっていくような人として、おそらくダンテやブレイクもそのような傾向を持っていた人ではないかと思います。

それから和紙への愛着です。和紙というものは、厳しい自然の中でそこに生きる人の営みとしてずっと行われてきているものですから、和紙への愛着というのは、和紙をつくっている人への愛着と結びついているのではないかと感じています。

また、私は新村出のことを、「自然を愛し、人間を愛し、言葉を愛した」という言い方をしているのですが、新村出の学風は国語学、言語学を理論的体系的にかっちりつくるというタイプではなく、自らも言っているとおり非常に歴史主義的です。これまで使ってきた人間の言葉をとても大事にして、語源語誌に興味を持つというのもそこから来ていると思うのです。

私はそういう意味で、新村出もヒューマニストである、これは寿岳文章と新村出、両者に通底しているのではないかと漠然とではありますが感じております。

そしてそれが次男の新村猛、長女の寿岳章子に受け継がれているようにも思います。次男の新村猛は、むしろ父の新村出以上にヒューマニストという言葉がぴったりであると多くの人からみられています。私もまたそれを受け継いで、高校時代からヒューマニズムをひとつの生き方にしようと思ってきました。そこで、今申しました親子二代のことを少しお話ししたいと思います。

補論　新村猛、寿岳章子をふくめた親子二代の付き合い

寿岳文章はかなり積極的に甲南大学文学部のためにいろいろな努力をしたようで、図書館長も務めていましたが、文学部にフランス文学科を設置して新村猛を呼ぼうとして果たせなかったことが、大学を辞する遠因となりました。新村猛の主張するヒューマニズムは、著書『ロマン・ロラン』（岩波新書、1958年）によく表れていると思います。寿岳文章の回想文のなかにこの甲南大学仏文科設立について触れているものがあります。私は父である新村猛がこ

の『LIFE SCIENCE』をきっちりと保存をして、その部分に赤線を引いてあるのを見ましたので事情を知ることになりました。

新村先生の息子さんの猛君がフランス文学をやっていて、甲南大学に本気でフランス文学科を置くというのなら定年をまたずに名古屋大学をやめて甲南へ行ってもいい、君がやめずにそこにいるんなら、という話が煮詰まった。それで…ちゃんとフランス文科をつくって新村猛君を呼ぶということを、大学として決めておいたにもかかわらず、そんな約束はしていないということになった……しばらくすると、甲南大学ではフランス文学科をつくる意思はない、あれは虚報だという噂がよその大学にひろまり…それが新村君の耳に入って、当然同君は憤慨する。そして私も、そういうことならやめると……。

（『LIFE SCIENCE』125　1978年1月）

娘の章子先生はよく父上の寿岳文章とともに、ときには一人で新村邸を訪れて、新村猛とも会っていましたので二人は親しい間柄でした。章子先生の新村猛への追悼文を紹介しておきます。新村出記念財団の理事長を務めていたときのもので、「なつかしき猛先生」と題されたものの一部です。

……ただ私はもう少し違った感覚で新村猛先生を我が心に重ねる。もともと私が新村先生を存じ上げているのは、父寿岳文章が御尊父新村出先生に大そうかわいがられていて、屢（しばしば）、新村家へ出入りしていたのに折々くっついていった時のお出会いによるものだ。理科系であった私の弟はそういう経験はない。父は国語学を志した娘に、その道の大家である新村出先生を知らせたかったので、よくいっしょに出かけた。そして後には私単独で何回も、とりわけ東北大に入ってからは、帰省の度ごとにあつかましくおうかがいしたのである。

その出先生が心を労して愛しておられたのは御子息猛様。だから私の家では父は「猛さん」とか「猛君」とか呼んでいたし、私は私で、当時父君の『広辞苑』関係の仕事のよき助手であった猛さんが、絣の和服などをお召しになったごくごく書生風な若々しい御様子で原稿をもって御自分のへやから出先生のおへやへやって来られる、そういう風景を見ているものだから、どうしても「仰ぎ見る」というような心情よりはもっと身近に猛先生を感じていた。さらに父は、出先生が何かにつけて「猛は」「猛は」といろいろお話になるのを又我が家で話すのが常であった。そんな話の一つに「どうも猛は一つのことにうちこみすぎて、たとえば食卓のしょうゆびんを自分の手許にひきよせたらもとへ戻さない」などのお話があったのを、例の如く我が食卓の話題にした。私たちは「猛さんて坊ちゃんなのだ」と、むしろそういうふるまいを失礼な言い分ながら、いとしいように受けとっていた。要するに大らかでおっとりしておられたのだ。出先生とてもあのしょうゆびんのエピソードを猛先生への愛情としてお話なさったのだ。……

やがて父は、自分のつとめる甲南大学に猛先生をお迎えしたがったが、これはきわめて不愉快な学内事情で実現をみなかった。このことは、父がやがて甲南大を去る原因の一つになったが、出先生の弟子であった父が、御子息の猛先生を愛していたのも絣時代の若き「猛さん」の志を大いによしとしていたからこそであろう。

父の代わりのように、私は、晩年の猛先生にあれこれのことでさらにお近づきを得ることになったが、私は深い思いで猛先生におつきあいさせて頂いたことであった。それは何十年にもわたる歳月がかかわっていたのである。

（『緑の樹　新村猛追想』同時代社、1995年）

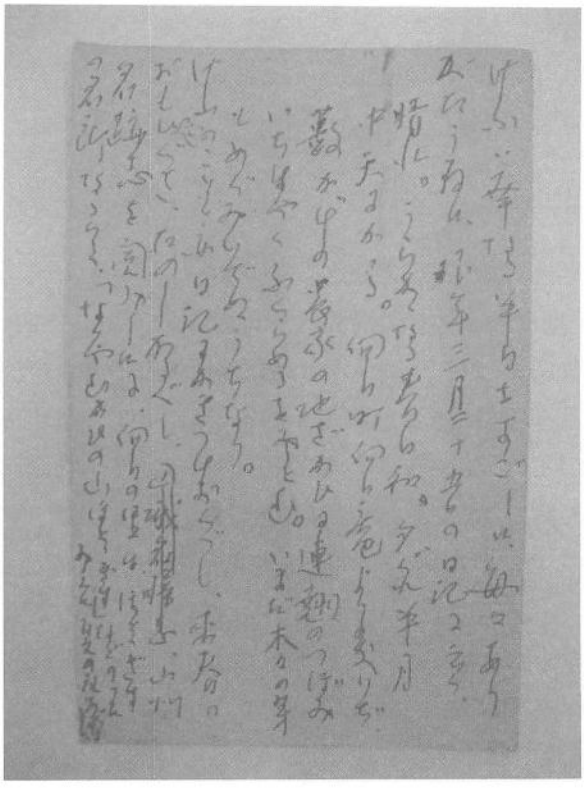
新村出記念財団を設立するときには新村出が遺したたくさんの資料があり、父の新村猛は心血を注いで財団を立ち上げました。その理事長を章子先生が9年間務められたというのは、新村出と寿岳文章とのあいだに始まった非常に長い付き合いから続いてきた帰結だったように思えます。私はそれぞれの分野については素人なのですが、そのような両家の深い縁から講演の依頼を断るわけにはいかないと思い、今日は皆様にお話をした次第です。

［文字起こし：長野裕子］

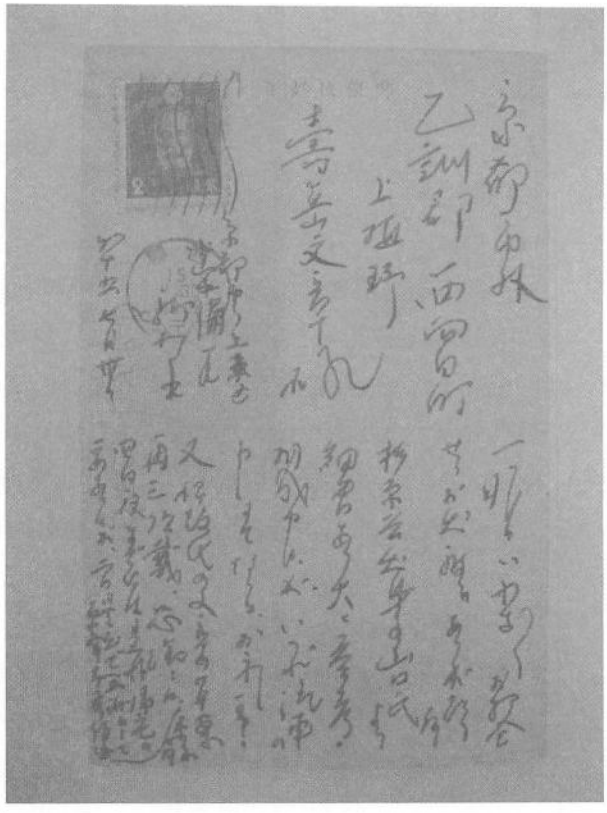
龍華院

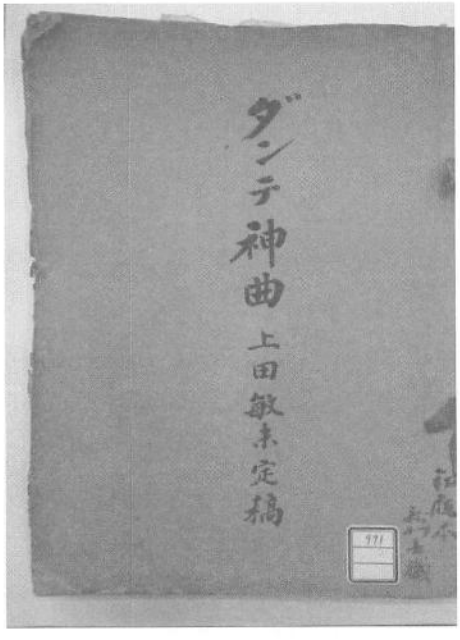
石峯寺

昭和10年4月3日 新村出より寿岳文章宛葉書

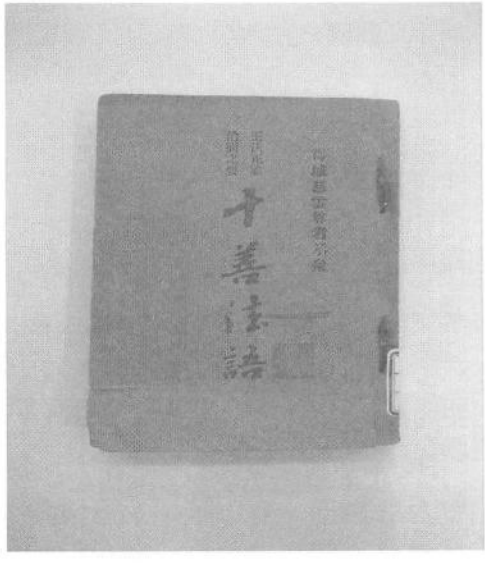


昭和15年7月30日 新村出より寿岳文章宛葉書





上田敏『ダンテ神曲』未定稿



『十善法語』

（新村出記念財団重山文庫所蔵）